OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞信多純一著『浄瑠璃御前物語の研究』
Author(s)	正木, ゆみ
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

信多純一著『浄瑠璃御前物語の研究』

正木ゆみ

『浄瑠璃御前物語』（以下『浄瑠璃』と略称）は、三河国矢作の長者の娘で、峰の薬師の申し子である浄瑠璃御前と、奥州の藤原秀衡のもとへ向かう源氏の御曹司牛若との一夜のはかなくも情熱的な恋の物語である。中世に成立したこの物語は、座頭によって語られ、近世には、操浄瑠璃という新しい芸能を生むのみならず、多くの音曲・文芸・絵画の題材として豊かに展開していく。本書は、この『浄瑠璃』の諸本研究・注釈研究において、業績を積まれてきた信多純一氏が書き下ろされた書で、氏の『浄瑠璃』研究の集大成といえよう。

本書は、第Ⅰ部「『浄瑠璃御前物語』の成立」（第一～三章）、第Ⅱ部「『浄瑠璃御前物語』の展開」（第一～三章）、結章「『浄瑠璃御前物語』の世界」、「付録」、という構成を持つ。

前述の通り、『浄瑠璃』は、日本文化・文学史上きわめて重要な作品で、諸本も多く現存しており、その研究も進められてきた。しかし、『浄瑠璃』が、そもそもどのような物語として成立したのか、その原像をめぐっては、議論が分かれるところであった。特に、二人の一夜の恋の後に展開する「吹上（旅中の牛若の受難を描く章段）」以降の話が、本来備わっていたのか、あるいは後の増補であるのかが議論の焦点であった。

信多氏は、前者の立場であり、現存諸本の中でも、「申し子」から「吹上」以降の展開までを適宜要約しながら網羅する山崎美成旧蔵写本（以下「山崎写本」と略称）こそが、『浄瑠璃』の原像を伝える善本と主張されてきた（『絵巻上瑠璃』［京都書院　昭和52　辻惟雄・坂田泉と共編］、『じやうるり　十六段本』［大学堂書店　昭和57　横山重と共編］）。

本書第Ⅰ部第一章「『浄瑠璃御前物語』の原像」では、その説を、諸本の綿密な校合により改めて立証されるとともに、『浄瑠璃』は、峰の薬師の申し子浄瑠璃御前が、恋の受難を経て、成神成仏の果を遂げる本地物であることを述べられる。

第Ⅰ部第二章「『浄瑠璃』新出本二種をめぐって」では、新出本である阪口弘之氏蔵本『十二たんさうし』（慶安五年［一六五二］写本　以下「阪口本」と略称）の書写姿勢や後記などを根拠に、山崎写本が『浄瑠璃』の原像を伝える本であるという説を一層強固なものとされた。信多氏が、本書を書き下ろされたのも、この阪口本との出会いが大きな契機であるという（本書「あとがき」参照。本書「付録」に、阪口本の翻刻と影印掲載）。

第Ⅰ部第三章「復原『浄瑠璃御前物語』」では、山崎写本を中心に、現存諸本から、原像『浄瑠璃』を構成する諸要素を網羅した表「『浄瑠璃御前物語』復原案」を作成されている。この復原案は、今後の『浄瑠璃』研究の基礎となる労作といえよう。

そして、第Ⅱ部では、「悲恋物語であり、本地物構造を持つ」（本書結章二七四頁）『浄瑠璃』の原像の本質が、様々に形を変え

ながらも、中世・近世の音曲・文芸・絵画に脈々と受け継がれていく様相を、復原案も活用しつつ、鮮やかに提示されている。

第Ⅱ部第三章「近世初期小説と『浄瑠璃』」については、昭和五十五年六月開催の日本近世文学会春季大会での氏の御発表「『浄瑠璃御前物語』の原像とその影響―仮名草子を中心に―」が基になっていることと推察する。阪口本の出現により、『浄瑠璃』の原像がより鮮明になったからこそ、本書において初めて、長年あたためてこられた御論を発表されたのであろう。我々近世文学研究者にとっては、大変有り難いことである。

特に、稿者が強く関心を抱いたのは、同章で取り上げられた、近世初期小説『恨之介』と『浄瑠璃』との、従来知られていた以上の深い関係である。『恨之介』と『浄瑠璃』との関係は従来指摘されてきたところであり、『仮名草子集』（岩波日本古典文学大系　昭和40　前田金五郎校注）の頭注・補注にも、『浄瑠璃』諸本から文辞が多数引用されている。

しかし、本書第Ⅱ部第三章では、『浄瑠璃』復原案を核に、『恨之介』（古活字本）と『浄瑠璃』との関係を再検討され、その結果、従来指摘されてこなかった文辞や場面についても、両作の密接な関連を新たに指摘された。そして、信多氏は、『恨之介』の作者が、『浄瑠璃』の諸本から取捨選択して文辞を取り入れているのではなく、『浄瑠璃』の原像を伝える一本に拠っていること、また、文辞のみならず、『浄瑠璃』の原像の構成（＝本地物構造）をも取り入れているという新見も提示された。

さらに、『浄瑠璃』の影響下になった中世小説『ふくろう』（本書第Ⅱ部第二章「中世小説と『浄瑠璃』」参照。本書「付録」に新出の奈良絵本『ふくろう』の翻刻と挿図掲載）の文辞や構成もまた、『恨之介』と密接な関係を持つことを指摘された。『恨之介』と『ふくろう』との関係は、今まで本格的に論じられたことはなく、本書の指摘は貴重である。

もちろん、周知のように、『恨之介』は、先行する多くの芸能や小説から文辞を取り入れて成立している。しかし、本書の指摘により、『浄瑠璃』の原像を伝える本、およびその影響下に成る『ふくろう』が、文辞レベルにとどまる典拠とは決して同列ではなく、『恨之介』の物語全体の構造にまで及ぶ、より深いレベルでの典拠として存在することが浮かび上がって来たのである。

このように、本書は、『浄瑠璃』そのものの研究のみならず、その影響下に成る中世小説・近世初期小説の研究においても重要な問題を多く提起する意義深い書といえよう。

（岩波書店、二〇〇八年八月、三六〇頁、一一，五五〇円）

（まさき・ゆみ　京都女子大学准教授）